

# 令和4年度 群馬県水産試験場成果発表会 (2023年2月8日)

会場：ビジターセンター（県庁舎2階）

13:05~13:25	<b>1 濁水に強いアユの選抜方法の検討～環境適応力の高い系統の開発に向けて～</b> 水産試験場 生産技術係 神澤 裕平
課題要旨	近年、台風や集中豪雨により河川で濁りが発生しやすくなり、放流アユの流下による漁場からの散逸が問題となっている。そこで、濁水で流下しにくい系統の作出に向けて、濁水状況下での「とびはね試験」による個体選抜を実施し、その有効性を検討したので報告する。
13:25~13:45	<b>2 天然アユとの交配により誕生した新しい江戸川系アユの冷水病耐性</b> 水産試験場 水産環境係 阿久津 崇
課題要旨	今年度の県産アユ種苗の系統は、天然アユとの戻し交配によってリニューアルされた江戸川系（江戸川系 ver. 2）である。今回は、江戸川系 ver. 2 と従来の江戸川系との間で冷水病耐性を比較した結果を報告する。
13:45~14:05	<b>3 LED照明を用いたアユ飼育試験</b> 水産試験場 生産技術係 齋藤 駿介
課題要旨	近年、ヒラメやカレイ類においてLED 緑色光照射による魚の成長促進効果が認められ、「光養殖」の技術が注目されている。そこで、知見がないアユにおいて、赤、青、緑、白と異なる4色のLED照明条件下で飼育試験を行い、飼育されたアユが受ける影響を検証したので報告する。
14:05~14:25	<b>4 アユのコツキ症状を軽減させる飼育方法の検討</b> 水産試験場 水産環境係 塩澤 佳奈子
課題要旨	アユの体表が損傷する「コツキ」は、飼育時におけるストレス症状であると考えられている。そこで、飼育密度や明るさなどの飼育環境がコツキの発生にどのような影響を及ぼすのか検討したので報告する。
14:25~14:45	<b>5 冷水病菌が検出可能なPCR法の信頼性</b> 水産試験場 水産環境係 鈴木 究真
課題要旨	冷水病の原因菌である <i>Flavobacterium psychrophilum</i> が検出可能なPCR法は複数報告されているが、どのPCR法が冷水病の診断に最も適しているのかについては明らかになっていない。そこで、冷水病菌検出用PCR法の信頼性について、検出感度と特異性の面から実験を行ったので報告する。
〈 休憩 〉 14:45~15:00	
15:00~15:20	<b>6 アユの継代飼育に伴う計数形質の変化</b> 水産試験場 主席研究員 田中 英樹
課題要旨	鱗数や鰭条数といった計数形質は、天然アユと人工アユで差異が確認されている。今回、人工アユのこれらの形質が継代を重ねることでどのように変化するのか調べたので、その結果について報告する。
15:20~15:40	<b>7 渓流魚釣り場における漁業管理の有効性</b> 水産試験場 川場養魚センター 山下 耕憲
課題要旨	渓流魚の資源量を増加させるには種苗放流だけではなく漁業管理も重要である。漁業管理の方法としてキャッチアンドリリース、禁漁、ルールの厳しい特設釣り場の設定などがある。今回は渓流魚の漁業管理が資源量に与える効果について評価したので、その一部を報告する。

15:40~16:00	<b>8 第3の群馬県産ブランド魚開発</b> <p style="text-align: right;">水産試験場 川場養魚センター 新井 肇</p>
課題要旨	<p>群馬県産ブランド魚として、食用のギンヒカリと遊漁用のハコスチを開発し普及を行っているが、地域ブランド魚は各地で群雄割拠している。そこで、新たに第3の県産ブランド魚開発を試みているので紹介する。</p>
16:00~16:20	<b>9 塩水を用いたマス類の高付加価値化研究</b> <p style="text-align: right;">水産試験場 川場養魚センター 井下 眞</p>
課題要旨	<p>魚類の高付加価値化の手法として、粉碎塩や人工海水を溶解した塩水に一定期間浸漬することで、成長促進や切り身等にしたときの味上げ効果が期待できる。そこで、マス類における塩水浸漬の効果について検証したので、報告する。</p>